

人形姫

山本幸久

第四回

4

「ロオオオオオツ」「キャツチ」「ロオオオオ」「キャツチ」「ロオオオオツ」「キャツチ」

威勢のいい掛け声と共に、かねつき鐘撞市内を流れるひきぬきがわ曳抜川をボートが進んでいく。乗り手はみんな鐘撞高校ボート部の現役メンバーだ。つまりもりおかきまろへい森岡恭平の後輩達なのだ。

ボートには男子が五人乗っている。ただしひとりかじとは漕いでいない。舵手だしゆといい、文字通りボートの舵取り役である。そのひとりだけが進行方向をむき、オールを漕ぐ四人に指示をだす。レースともなれば舵手はきようせう競漕相手の出方や状況に応じて、いかに自分達に有利な試合展開にすべきか、どのタイミングでスパートをかけるかといったことまで考えねばならない。ということまで知っているのは、恭平

自身が舵手だったからだ。高校二年のときにインターハイで優勝したのは、この種目だった。

ボートの種目はさまざまだが、インターハイでは左右両側のオールを漕ぐスカル種目が三つおこなわれる。漕手がひとりのシングル、ふたりのダブル、そしてこの舵手つきクオドルプルだ。

四人で漕ぐので、当然ながらシングルやダブルよりもずっと速い。四人の息があえばなおのことである。水面を滑るように進んでいき、見ている気持ちがいい。

しかした。

「なつちやねえなあ、あいつら」

熊谷良隆が、ぼやくように言った。もとより艶々の肌が、秋の陽射しを受けて、さらにテカっている。いよいよもってビリケンさんだ。双眼鏡を目に当てているのは、後輩達の動きをよりよく見るためだ。

森岡人形の営業および父親の道隆みちたかともども手足師の彼は、恭平より一学年下のおなじ鐘撞高校のおなじボート部で、数年前からその部のコーチをしている。平日は顧問の先生に任せているものの、土日は後輩達にかかりきりだった。

「そうは思いませんか、キャプテン」

キャプテンは勘弁してくれと、今朝から何度も繰り返しているの

に、良隆は一向に改めようとせず、恭平はいい加減諦めた。

たしかに後輩達は、なっちゃんいなかった。威勢がいいのは掛け声ばかりで、オールがまるで揃わないのだ。バラバラとまではいかないが、つねにだれかしらが一テンポずれ、四人がピタリとあうことが皆無だった。見ていてじれったいくらいである。

実際、数年前から鐘撞高校ボート部はインターハイにでていない。県大会ですら散々な結果で敗退している有様だ。恭平がいた頃には五十人近く部員がおり、校内でも一、二を争う花形のクラブだった。練習見たさによその高校からも、この曳抜川の河川敷には大勢の女子が押し寄せ、黄色い声が飛んでいたものである。混乱を避けるために警官がきたことまであった。

ところがいま、おなじ河川敷にいるのは恭平と良隆ふたりきりである。そもそも部員がボートに乗る五人しかないのだ。三年生は夏休み前に引退してしまい、一・二年生だけだとはいえだ。

まったくもって、なっちゃんない。

でも恭平は言えた義理ではなかった。

ボート部を見学したい、後輩達に混じって練習もしたいと良隆に言ったのは、ひと月近く前だ。そして今日、十一月第一土曜によく実現した。

部員達と校内でウエイトトレーニングおこない、河川敷にきてか

らは五キロほどランニングをしたところ、すっかりへばってしまっ
た。良隆にはマジしんどいとは言われていたが、ここまでとは思っ
ていなかった。体力が落ちているうえに、自分の体重が重くてたま
らないというのも大きい。高校のときに培った筋肉が、脂肪と化し
てしまったせいだ。

本来ならば艇庫ていこからシングル用のボートをだして、後輩達とともに
曳抜川にでるつもりだった。高校時代は舵手つきクオドルプルの
舵手だけでなく、シングルスカルでもインターハイに出場していた。
優勝にまではいたらずとも、好成績を残しているのだ。

しかし情けないことに陸上練習だけで、手足が震えて腰がガクガ
クだったためにやめておいた。川へではイイものの満足に漕げず
に、岸にも帰れないで往生するなんて羽目になったらシャレになら
ない。

ほんと、なっちゃないぜ。

「俺らんときにあんな漕ぎ方してたら、シヨーキにぶん殴られてい
ましたよね」

双眼鏡を目に当てたままで良隆が言った。シヨーキとはまた懐か
しい名前である。恭平達が高校生の頃のコーチだ。シヨーキは名前
ではない。あだ名だ。漢字で書けば鍾馗しゅうきである。目がまん丸で、ア
ゴヒゲを生やした容貌は、五月人形の鍾馗様にそっくりだったのだ。

とはいえ恭平が付けたのではなく、ボート部に入ったときには、すでにそう呼ばれていた。

鍾馗はすでにこの世にいない。酒豪の彼は、好きな酒のせいで病を患い、最後の一年は市内の総合病院を出入りしていた。恭平はすでに森岡人形を継いでおり、良隆をはじめ当時のボート部のメンバーで、鍾馗を見舞いにかけたこともある。

まん丸で大きな目はそのままだったが、アゴヒゲは真っ白で、すっかり痩せ衰え、鍾馗ではなく死神のようだった。それでも鍾馗は昔話に花を咲かす恭平達を、ベッドの上で穏やかな笑顔を浮かべながら見つめていた。

亡くなったのはその一週間後だった。葬式にも参列した際、鍾馗がまだ五十八歳だったと知り、恭平は少なからず驚いた。死神に成り果てた姿は七十歳にしか見えなかったからだ。計算をしてみると、恭平が高校生の頃は四十代前半だったことも信じ難かった。

「おまえも鍾馗みたいに殴ればいい」

「なに言ってるんですか」良隆は双眼鏡から目を外し、顔を恭平にむけた。「そんなことしたら、学校やPTAに吊るし上げられますよ。下手したら警察沙汰になって、さらには暴力コーチが勤める会社の人形を買って不買運動が起きて、ウチの会社の売上げにだって響きかねません」

そんな莫迦ばかなと言い返そうとしたが、良隆のテカった顔は真剣そのものだった。たしかにいまの世の中、大いに起こり得る話だと恭平は気づく。だがそう考えると、鍾馗に何十発と殴られた俺達の立場はどうなんだという気持ちにもなる。

「いまも週四日の練習は多過ぎる、三日にできないかって、校長先生に呼びだされて言われているんです。そのくせ、ここ三年以内でインターハイにでられなければ廃部を検討せざるを得ないとも」

「練習減らして強くなれというのは無茶な話だな」

「俺もそう言い返しましたよ。でもね、校長先生が言うには無駄な時間を省いて、効率よく練習の質を高めていけばできるはずだ、実際、バスケ部と卓球部はそれで実績あげているって。けどどっちも部員が三十人以上いて、コーチが元オリンピック選手とか元実業団とかなんですよ」

「クマも元インターハイ優勝者だろ」

インターハイで優勝したときに、良隆は恭平とおなじく舵手つきクオドルプルのチームで、ストロークだった。四人の漕手のいちばん前、つまりは恭平とむきあう位置に座って、オールを漕いでいたのだ。

二十年近く昔も、いまと変わらぬビリケンさんみたいな顔だったが、恭平とおなじように、女の子から黄色い声を浴びていたものだ

った。彼にすれば最初で最後のモテ期だったのかもしれない。

「校長先生とおんなじこと言わないでください」良隆は不貞腐れた。ふてくさ

「元オリンピック選手や元実業団はそれなりのお金を貰ってますけど、俺はボランティアなんですから」

何年か前にボート部の移動手段として、十人乗りのハイエースを良隆が購入していたのを思いだす。もちろんそれも彼のポケットマネーにちがいない。

「でもクマ、あんとき自分からコーチをやるって言ったわけだし」

あんときがいつかと言えば、死神と化した鍾馗を見舞いにいったときだ。一年以上も自分がいない鐘撞高校ボート部を、鍾馗は自分の身体以上に心配していた。すると俺でよければコーチをしますと、良隆が申しでたのである。

「ほんとはキャプテンにコーチをしてほしかったんだと思うんです、鍾馗は」

「そんなことねえだろ」

「ありますって。キャプテンもわかってたはずですよ」

良隆が言うことはある程度、的を射ていた。なにせ鐘撞高校ボート部について話をするあいだ、鍾馗は恭平をじっと見据えていたのだ。

しかし当時は会社のことで手一杯で、とてもではないが高校のボ

ト部の面倒なんて見られる状態ではなかった。いまでもそれは変わらない。

「クマはクマでよくやってるよ」

「よくやった結果がこれじゃ駄目でしょ。そのうち鍾馗が枕元にでも化けてでてきます。そんなときどう言い訳をすればいいものか。これでボート部がなくなったら呪い殺されるにちがいありません」

これまた冗談ではなさそうだ。良隆は真顔で、ぶるりと身震いまでしている。恭平も自分を見据えた鍾馗の双眸そうぼうを思いだす。

「あの五人だつて素直でイイ子達じゃないか」

恭平は言った。この言葉に嘘はない。トレーニングや乗艇練習の準備を見ていると、無駄なおしゃべりをせず、キビキビ動く。良隆の話をよく聞き、挨拶あいさつもきちんとしてできる。見ていて清々しい気持ちになるほどだ。

「個々を見ればオールオールの漕ぎ方は間違っちゃないぜ。息さえあえばどうにかなるんじゃないやねえの。そこそこはクマはどう思う？」

鍾馗に呪い殺されると怯おびえたのではない。それでもここはひとつ、キャプテンとして助言をすべきだと思つたのである。

なのに良隆はウンともスンとも言わない。ふたたび双眼鏡を目に当てているのだが、その方角はボートの五人ではなく、まっすぐ前の対岸にむけられていた。恭平もそちらをむく。自転車が一台走っ

ていた。方向としては鐘撞市街からだ。ペダルを漕いでいるのは、長めのスカートを穿はいているので女性らしい。川幅がそこそこあるので顔までは確認できなかった。

買い物帰りなのか、前カゴに荷物をぎっしり詰め、うしろの荷台には段ボール箱を一箱括りつけていた。さらによく見れば自転車よりも長い棒が、ハンドルおよびサドルと車輪のあいだに一本、横に付けてあるのがわかる。どうやって付けたかまではわからない。それにしてもよくもあれだけの量を自転車で運ぶ気になったものだと感心してしまう。

すると隣で良隆が声を張りあげた。

「溝口みぞぐちさあああん、溝口真純ますみさあああん」対岸を走っていた自転車が停まった。「森岡人形の熊谷良隆でええす、社長もいっしょだよおお」

ボート部の五人が何事かと、ボートの上からこちらを見ている。

あれが溝口真純なのか？

溝口真純が頭師の宮沢みやざわに呼びだされ、森岡人形の仕事場で人形の頭をつくったのは、ほぼひと月前である。

結論から言えば、完璧と喋がぜんっていい出来だった。恭平としては自分がつくった頭より、俄然細やかで繊細な仕上がりだと認めざるを

得なかった。

参考のためにと、宮沢がつくった頭を作業台に置き、作業の要所
要所でしげしげと見つめていたり、手に取って撫で回したりしてい
た。峰みねに聞いたところによれば、話しかけていたこともあったら
しい。

象かたどった頭に、顔のパーツを胡粉ごふんで盛りあげていく仕上げという作
業がある。当然ながら胡粉の量の加減次第で、表情がまるでちがっ
てきてしまう。これを溝口は絶妙にこなし、宮沢のと寸分違わない
カタチにしてみた。

目、鼻、口を小刀で切る切りだしや顔を描く彩色にしても、見事
の一言に尽きる。丁寧かつ大胆なのだ。宮沢が描いた顔をそっくり
そのまま真似ているので、瓜二つにもかかわらず、不思議と溝口の
描いた顔のほうが愛らしく見えた。より親しみやすさを感じたとい
うべきか。どこがどうというのは何度見比べても、恭平にはわから
なかった。ただそう感じたのである。なお言えば子どものために買
うのなら、溝口の描いた顔だろうと思った。

そしてまた、一心に作業を進める溝口を見ているうちに、恭平は
妙な錯覚に陥ることがあった。彼女の姿が父と重なったのだ。ただ
ならぬ緊張を漲みなぎらせ、いざ小刀なり筆なりを動かすと、微塵みじんの迷い
もないのが似ていなくもない。

だがより具体的に父とおなじところがあつた。溝口は両利きだったのだ。作業中、筆や小刀を器用に持ち替える場面を幾度も見かけた。祖父もそうだった。

弟の慎次しんじも、赤ん坊の頃から両方とも上手に使いこなせていた。父も祖父もおなじだったらしい。親族の集まりでこの話を聞く度に、恭平は自分が仲間外れに思えたものだった。いまでもその気持ちはあ
る。

それはともかくとして、溝口は一日半かけて頭を完成させた。だれよりも褒め讃ほめたえたのは宮沢だ。ぜひウチで働いてくれと溝口本人に詰め寄る始末だった。もちろん恭平もそのつもりではいた。しかし溝口はまだ美大の大学院生なのだ。社員として採用するにしても、卒業後の来春である。それまでは弟の慎次が言っていたように、週二のバイトとしてきてもらうつもりだった。その話をしたところだ。なに寝言言ってるんですか、五代目。この子は即戦力ですよ、即戦力。いまこの時期にこそ、毎日きてもらって、俺らといっしょに頭をつくってもらわなきゃ、意味ありませんでしょうが。

宮沢に嘔へんげみつくように言われ、恭平が辟易していると、溝口自身が口を挟んできた。

あたし、毎日でもかまいません。なんだったら明日から働いてもいいくらいです。大学院は卒業制作を残すだけなんで、どうにでも

なります。ぜひ働かせてください。お願いします。

「ここだなにしていらっしやるんですか」

はたして自転車の女性は溝口真純だった。彼女はやや先の橋を渡って、対岸からこちらへと回ってきた。荷物だらけの自転車は土手道に置き、河川敷に下りてくるなり、そう訊ねてきた。

「俺が高校時代、ボート部だった話、歓迎会のときにしたでしょ。覚えてます？」

「ああ、はい」

良隆の問いかけに、溝口の返事は曖昧だし、目が泳いでいた。たぶん覚えていないのだろう。溝口の歓迎会をおこなったのは三週間以上も前である。場所は鐘撞駅前の中華料理店だった。元は居酒屋だったのを居抜きで営業しているので、奥にはけっこう広めの座敷があり、歓迎会はそこでおこなった。

酔っ払った良隆が溝口の隣に座り、なにやら熱弁していたのを恭平は見ている。ただし五分も経たずに良隆は父親の道隆に羽交い締めにされ、べつの席に強制移動させられていた。

この歓迎会で珍しいことがあった。宮沢が一滴も酒を口にしなかったのである。だれも呑むなと禁じてはいない。自らの意志でそうしていたのだ。

その後も宮沢は酒を控えているようだ。本人にたしかめたわけではないが、少なくとも朝は九時前後に出勤し、酒臭いこともなくなった。

「いま川でボートを漕いでいるのが、現役の本部部だね。彼らのコーチを俺がやってて」

「休日なのに大変ですね」

「いやいやいや」良隆が首を横に振る。「可愛い後輩達のためさ。このくらいなんでもないよ。社長は俺とおなじ高校のおなじボート部だ」

「それは知ってます」溝口の視線が良隆から恭平に移った。「フィギュア事業部の部長さんに聞きました」

弟の慎次が？

「なんて言ってた？」思わず恭平は訊き返す。

「ああ見えても社長さんは昔、ボート部のキャプテンでブイブイ言わせてたって」

どう見えるというのだ。

「ブイブイ言わせてたよお」良隆がうれしそうに言う。「俺らの高校は弁当だったんだけど、キャプテンは持ってこなくてもよかったの。どうしてだかわかる？」

「それも部長さんに聞きました。ファンの女の子達が代わりばんこ

に、つくってきけていたそうですね」

慎次のヤツ、余計なことを。

「そうそう。しかも二時間目と三時間目のあいだの早弁に、昼休みの弁当、そして部活後の弁当って、一日に三つも弁当食ってたんだぜ。ぜんぶフアンの手づくり。凄くない？」

はしやぐように言う良隆を恭平は軽く睨んだ。過去のモテ話くらい、虚しいものはない。男性機能が不全となつたいまでは尚更である。

それにしても自分に弁当をつくってくれてきた彼女達はいつたいいま、どこでどうしているのだろう。社長に成り立てで鐘撞市に戻ってきた頃は、「森岡キャプテンですよ」と同世代の女性に市街で話しかけられることは何度もあり、食事でもと誘ってくるひともしなくなかった。まだ二十代後半で、高校をでて十年経っておらず、ボート部だった頃の神通力がちよつと効いていたのだろう。ここ数年はまったくくない。太って見た目が変わり、気づかれなくなったのかもしれない。

「高校のときは、インターハイで優勝したこともあるですよね」

「あるよお。そんなときは俺が漕ぎ手で」

「コオオオチイイイ」

五人の後輩達が叫ぶのが聞こえた。ボートはすでに川辺に着いて

おり、五人は下りている最中だった。

「いまいくよおお。ちよつと待ってろおお」後輩達に返事をしてから、良隆は溝口のほうを見る。「すみません、ちよつといつてきます」

そしてそそくさと駆けだす。

「社長さんはいかなくてもいいんですか」

「俺はコーチじゃないんだ」

「キャプテンだったのに？」

「それとこれとは関係ないさ」とは言いながらも、恭平はまた病魔に侵された鍾馗の双眸を思いだし、ブルツと身体を震わせてしまう。

「そんな薄着じゃ、寒いですって」溝口にからかうように言われてしまった。「今日は昼間でも気温が十六度で、風が少しあるから体感温度はさらに低いつて天気予報で言っていましたよ」

寒さで震えたのではないと否定はできなかつた。しかしその理由を説明するわけにもいかないので、恭平は話題を変えようと、土手道に止めてある自転車に目をむけた。

「えらい荷物だけど、あれ、ぜんぶ買ってきたのかい」

「そうです。こっちに引越してきたら、なんだかんだいるものがあった。でも自分のは前カゴの半分くらいなんですよ」

「それじゃ、あとの荷物は」

「須磨子^{すまこ}さんに頼まれて」

溝口が暮らしていたのは、美大近くにある女性専用のシェアハウスで、家賃は三万五千円だった。郊外だとしても東京では破格と云っている。ただし鐘撞市まで片道で二時間以上かかる。弟の慎次は通勤圏内だと言っていたが、溝口本人は鐘撞市に暮らしたい、できれば森岡人形の近くにアパートを借りるつもりです、と自分の歓迎会の最中に言いだした。すると離れた席にいたにもかかわらず、宮沢がこう言った。

俺ん家に暮らせばいい。家賃はいらん。タダで住まわしてやる。一人娘もずいぶん昔にお嫁にいき、妻を亡くした彼は、十何年も一軒家に独り住まいなのだ。これに溝口は乗りかけた。わからないでもない。おなじ三万五千円で鐘撞市に暮らすとしてもワンルームがやっただからだ。

しかしその場にいた森岡人形の社員およびパートさん達全員が慌てて止めた。いくら宮沢が七十代なかばのジイサンだとはいえ、赤の他人の若い娘が、一つ屋根の下に住むのはいかなものかと溝口を説き伏せたのである。

莫迦言え。俺がそんな下心があると思うのか。

宮沢は顔を真っ赤にして怒ったものの、だれも信用しなかった。下心がなくても、酒を呑んだらどうなるかわからないでしょうが、

宮沢さんは。

着付師の遊木陽一ゆぎよういちが窘めるたしなように言った。まったくそのとおりである。酔った宮沢が、両胸を手で鷺掴みわしづかにして揉んだせいで、職人希望だった新人の女性が辞めたのは、つい最近の出来事なのだ。溝口にはこの件について話してある。それでも彼女は家賃がタダは魅力ですよねえと未練がましく言った。

ならばウチに住みなさい。部屋はいくらでもあるし、会社まで十秒だ。私のことは心配するな。元妻の浮気現場を見て以来、男性機能は失われたままだ。十年近く病院に通っているが、治る気配はない。安心したまえ。

なんて言えるはずもない。恭平は黙ってハイボールを舐めるなように呑みながら、みんなが溝口を取り囲んで楽しげに話すのに、ぼんやり耳を傾けていた。

スウ姉さんのウチはどう？

セツ姉さんも思った？ 私いま、おんなじこと考えていたわ。

溝口を囲む輪の中から、阿波三姉妹あわの次女の勢津子せつこと三女の多香たか子が言うのが聞こえてきた。スウ姉さんとは長女の須磨子すまこのことである。三姉妹はみんな鐘撞市内ではあるものの、それぞれ家庭があり、別々に暮らしていた。ただし長女の須磨子もまた宮沢と同様、一軒家に独り住まいだった。夫をずいぶん昔に亡くし、ふたりの息

子は小道具師を継ぐことなく、東京の大学に進み、東京の会社に勤め、東京に居を構えてしまっていた。

二階をまるまる貸してあげたら？

そうよ、セツ姉さんの言うとおりだわ。どうせマモルもショージも戻ってきやしないでしょ、スウ姉さん。

マモルとショージは須磨子の息子達である。ふたりの妹にせつづくように言われても、須磨子は動じることなく、手酌でお猪口ちよこに酒を注いでいた。座敷はしんと静まり、みんなの視線が須磨子に集中する。酌をおえると、彼女はチェーン付きの銀縁眼鏡を外し、溝口を上目遣いで見ると、通る声でこう言った。

あなた、猫はだいじょうぶ？

「まさかあんなに猫がいるとは思いませんでした」

溝口が笑いながら言う。

「何匹いた？」

「うちの中に五匹、通いが七匹です」

須磨子が猫を飼っているのを、恭平はなんとなく知ってはいた。本人に直接、聞いたのではなく、社内の噂を耳にしたのだ。息子ふたりが東京へでていったあと、ペットショップで買ったのではなく、野良猫や迷い猫を飼い馴らしたのだという。

「俺もそんなにたくさんだとは思わなかったよ」

「旦那さんが亡くなってから、一気に数が増えたみたいですよ。妹さん達がおっしゃっていました」

氣い強そうに見えて寂しがり屋なのよ、スウ姉さんは。

セツ姉さんの言うとおり。適当に相手してやってちょうだい。

歓迎会の帰り道、溝口は勢津子と多香子に挟まれ、そう言われたらしい。さらにはだ。

スウ姉さんが家ん中で転んで怪我をしようが、病やまいに臥ふせてしまおうが、かまやしないのよ。

そうそう。ポックリあの世にいったっていいわ。

やだ、タカちゃん。いくらなんでもそりや言い過ぎだつて。ふふ。でもまあ、スウ姉さんがそうなったときに、残された猫ちゃん

達が可哀想でしょ？ だからあなたに住んでほしいの。

勢津子と多香子が言いそうなことだ。悪質な冗談を口にするのは、須磨子を心配する本心を隠すためにちがいない。それは溝口にもわかっているようだ。

ふたりの妹の旦那さんはまだピンピンしている。多香子などは、そのうえに娘夫婦と同居しており、五歳の孫までいた。朝は決まつて孫を保育園に送つてからの出社である。大変大変と言いながらも、多香子はいつもうれしそうだった。そんな彼女を須磨子が冷ややか

な目で睨みつけるのを、恭平は何度か見たことがあった。あれはもしかしたら嫉妬しつとだったのかもしれない。

「カゴの残り半分は猫のエサで、段ボール箱は猫砂でしてね。須磨子さんに頼まれて買ってきたんですよ」

「あの棒も？」

「あれはタカエダギリバサミです」

高枝切り鋏だと、頭の中で漢字に変換するのに、恭平は少しだけ時間がかかった。

「どうしてそんなものを」

「須磨子さん家の庭、ジャングルみたいになっているんですよ。今日はその手入れをしようかと思って」

「きみはそんなことまでさせられているのか」

「させられているんじゃないやありません。あたしが自分でやりますって言ったんですよ」

溝口は少しだけ非難がましく言い、拗すねたような表情になった。それが恭平にはとても愛らしく見え、心に僅わずかながらの小波がたつ。「家賃がタダで二部屋貸してもらっている、言わば居い候せうの身ですからね。このくらいはしないと」

二十代前半の若い娘が、居候という言葉が発したのが、妙におかしく、恭平は危うく笑いだしそうになる。

「須磨子さん家に引越して」

「二週間になります」

「須磨子さんとはウマくやってる？」

「あたしはべつになんの不満ありません。猫ちゃん達ともなかよくしています。ただまあ、須磨子さんはどうお考えなのかまでは、わかりかねますが」

「イッテアリテ、イチニンナシッ」

横一列に並んだボート部の五人が叫んだ。そんな彼らの前に良隆が立っている。

「もつと腹から声をだしてっ。もう一回っ」

「イッテアリテ、イチニンナシッ」

俺らも鍾馗に言わされたなあ。

五十人近くの部員が、声を揃えて一斉に言っていたのだ。そのときばかりは見学に来た女の子達も、黄色い声をあげることなく、妙な面持ちで見つめていたものだった。たった五人ではどれだけ声をあげても、風に吹き飛ばされてしまう。

「あれって、なにかのおまじないですか」

不思議そうに溝口が訊ねてくる。

「イッテアのテは競艇の艇で、競技用のボートを数えるときの単位で、一人と書いてイチニン。ボートをやったら、たいがいのひ

とが知っている言葉だ。ボートというのはね、漕ぎ手ひとりひとりがどれだけ力を入れて漕いだところで、みんなの息があわないと、バランスは崩れるわ、まっすぐには進まないわ、速度はでないわとまるきり駄目になってしまうものなんだ。自分の力を十二分に発揮しながらも、チームの一員である意識を持ち、そのチームに貢献するからこそ、さらにまた自分も活かされる。個人でもあり同時にチームでもあるのが、ボートを漕ぐことの醍醐味だいごみだと言っている。そうした意味を一艇ありて一人なしという言葉で表しているわけでした。しまった。つい熱く語ってしまった。

恭平は気恥ずかしくなり、それをごまかそうと二、三度、空咳からせきをする。そして溝口を横目で見ると、彼女は感心した顔でこう言った。

「それってつまり人形づくりとおんなじですよね」

「どこが？」恭平は思わず訊き返す。

「頭師に髪付師、手足師、小道具師、着付師と個々が自分の力を十分に発揮して、一体の人形をつくっているじゃないですか」

なるほど。そう言えなくもない。ただしボート部に所属していたときも、社長になってからも、恭平はそんなふうに考えたことは一度もなかった。

「つまり一体ありて一人なしですね」

溝口は腕組みをして、ひとりで頷うなずいている。

変な子だな。

そこでふと、恭平は溝口に訊く気でいたことを思いだした。あま
りにも些細ささいで、どうでもいいことなので、すぐに忘れてしまい、会
社で思いだしても、わざわざいまここで訊かずともと、先延ばしに
しているうちに、ひと月が経ってしまった。

宮沢に呼びだされ、頭をつくり会社に会社を訪れたときである。桐塑とうそ
をつくるのに、生麩糊しょうふのりを鍋で煮ている最中、溝口は鼻歌を唄いだし
た。それがどういうわけだか、親父がよく口ずさんでいた歌だった
のである。そばにいた宮沢も気づいたのは、その表情ですぐにわか
った。

これがメジャーでだれもが知っている歌であれば、さほど驚きは
しない。だがそうではなかった。恭平が生まれるどころか、親父が
まだ結婚もしていない、七十年代前半の歌謡曲だったのである。

当時、ほんの少しだけ流行はやったらしい。そして親父はこの歌を大
いに気に入り、シングルレコードを買って、仕事をおえてから自宅
で繰り返し聞いていたという。これは宮沢をはじめとした職人達か
ら聞いた話だ。

「あのさ」と恭平が話しかけると同時に、「キャプテンツ」と良隆が
駆け寄ってきた。ボート部の後輩達はべつの方角にむかって走り、

土手をのぼっている。部活はもうオシマイなのか。

「せっかくいらしたんですから、どうです？ ちょっと漕いでみませんか」

なにを言いだすのだ、この男は。

「いや、俺は」

「可愛い後輩達に手本を見せてあげましょうよ」

「あたしも見たいです」溝口が言った。やけにテンションが高くなっている。まるで思わぬプレゼントをもらったときのようだ。「ぜひ見せてください。社長さんが漕いでいらっしやるところ」

「俺も漕ぐんだよ、溝口さん」良隆が言い募る。

「ダブルスカルってことか」

「そうです。いま後輩達がそれ用のボート、持ってきますんで」

ひとりには不安だが、ふたりならばどうにかなるかもしれない。そしてまた恭平は良隆の思惑に気づいた。

要するに自分のイイところを溝口に見せたいんだよな。

昔から良隆はこうだった。あまりに押付けがましい自己アピールで、女の子を辟易させてしまうのである。まったく進歩がない。これが十代の頃ならば青春のページで済むが、三十なかばのオジサンだと痛々しい。でもそれを本人はわかっていないのだろう。注意しても直るものでもなからうし、それどころか機嫌を損ねて、仕事

に支障がでたら面倒なことになるかねない。

「ふたりだけで漕ぐのもあるんですか」

「あるある」溝口は恭平に訊いたのだが、答えたのは良隆だった。

「俺は舵手つきクオドルプルだけじゃなくて、ダブルスカルでもインターハイにでてるんだ」

「そのときも社長さんがコンビだったんですか」

これまた溝口は恭平に訊いているのに、「ちがうちがう」と良隆が答えた。「俺と組んできたのはおんなじ学年のヤツだよ。キャプテンはひとりきりで漕ぐ、シングルスカルというのをやってたんだ」

やれやれ。

良隆は溝口の気を引きたくて必死なのだ。見ていて気の毒に思えてきた。やはり高校時代の頃、良隆は恭平をエサに、自分の好みの女の子を誘うことが幾度かあった。そのときもこんな具合に良隆が割りこんできたのを恭平は思いだす。

ほんと進歩ねえなあ、コイツは。

「クマ、俺達も艇庫にいくぞ」

「でも後輩達が」

「自分で漕ぐボートは自分で運べと、鍾馗に言われたのを覚えてないのか」

鍾馗の名前をだすと、良隆の顔が多少なりとも引き締まった。

「そ、そうですね。いきましよう。それじゃ溝口さん。俺らすぐ戻ってくるんで待っててよ。帰らないでね」

「なにボヤボヤしてんだ、走れ、クマツ」

「はいっ」

後輩達はすでに艇庫からダブルスカルのボートを運びだし、五人がかりで持って、土手道を歩いている。恭平は走る速度を速めて彼らに近寄った。

「これ、俺とクマで運ぶんで、きみらはイイよ」

「え」「あの」「でも」「それは」「ぼく達が」

「いいの、いいの」良隆がやや遅れて辿り着く。そして戸惑う後輩達に諭すように言った。「自分で漕ぐボートは自分で運ばなきゃね。基本中の基本をうっかり忘れてた。悪い、悪い。はは。おまえ達、先に河川敷へ戻ってな。もちろん駆け足だぞ。ダツシユ、ダツシユ」

こんなに重たかったっけ。

後輩達からボートを受け取って肩に担ぐなり、莫迦に重く感じられたのだ。しかも二、三步進んでみたはいいものの、足が縛もつれて、よろけてしまった。

「だいじょうぶですか、キャプテン」

背後で良隆が叫ぶ。

「だいじょうぶ、だいじょうぶっ」

良隆にというよりも、まだ五十メートルも離れておらず、戻ってきかねない後輩達を安心させるため、恭平は声を張りあげた。そしてボートを担ぎなおし、前へ前へと進んでいく。

「キャプテンッ」

「だいじょうぶだって言ってるだろ」

「ちがいます、そうじゃなくて。溝口さんと話してるの、あれ、代だい官山かんやまの」

フィギュア事業部は代官山にあり、弟の慎次を〈代官山の坊ちゃん〉あるいは〈代官山の〉と呼ぶ職人が幾人かいた。熊谷親子もそうだった。

ただし本人にむかつては言わない。陰口とまでいかずとも、その言い方に刺とげがあった。四代目だった親父が許したとは言え、日本人形をつくらずにフィギュアなんでものにウツツを抜かす裏切り者と腹の中では思っているからだ。

良隆はとくに慎次を嫌っていた。なんであんなオタク野郎に大きな顔をされなきゃならないんですか、と酒席の度に恭平に絡んでくる。溝口の歓迎会でもそうだった。いまもきつと、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべているはずだ。

土手道を下りて、河川敷を歩いていく。そこへ慎次が近づいてき

た。溝口もいっしょだ。なにしにきたかと思いきや、「運ぶの手伝うよ」「あたしも」とふたりが申しでた。川辺までまだ少し距離がある。恭平としては助かったと思わないでもなかった。ところがだ。

「触らないでください」良隆が鋭い声が飛ばした。「俺達ふたりで漕ぐボートは、俺達ふたりだけで運ばなきゃいけないんです」

「そりゃ失敬」慎次はあっさり引き下がる。「駄目なんだってさ、溝口さん」

「すみません、余計なことをしてしまつて」

「よ、余計なことだなんてとんでもない」溝口がしおらしく詫^わびると、良隆は慌てて取り繕^{つくろ}うように言った。「そのお気持ちだけで、じゅうぶんでござる」

なんだよ、ござるって。

「兄貴はいつからまたボート、やってんの？」慎次は恭平と並んで歩きながら訊ねてくる。「やっぱ、あれ？俺が身体を動かしたほうがいいって勧めたから？」

当たらずとも遠からずだ。しかし、そのとおりだと答えるのは面白くない。なにより慎次のからかうような口ぶりが気に入らなかつた。

「後輩に見本を見せてくれと、クマに頼まれたただけ。おまえは関係ない。おまえこそ、どうしてここにいるんだ？」

「鐘撞駅からウチへ帰るのに、川沿いを歩いてたら、溝口さんを見つけたもんでね」

「ビックリしましたよ。いきなり話しかけられて」

「少しいろで溝口が言う。」

「ウチになんの用だ？」

平日ならまだしも、休日にわざわざ慎次が自宅を訪ねてくることは滅多になかった。せいぜい法事のときくらいである。

「俺が恵比寿のクラブでDJをやってる話、したことあったっけ？」

「おまえがDJ？ どうして？」

「どうしてと言われても困るよ。兄貴だって、どうしてボートを漕ぐのかと訊かれて答えられる？」

「いっしょにするなど言い返したいところだが、恭平は口を閉ざした。じきに川辺だ。後輩五人が待ち構えている。」

「そのクラブで昭和の歌謡曲が流行っついでね。ほら、親父が好きで、よく口ずさんでいた歌あっただろ。俺のDJで、あのレコードを今度かけようと思っついでさ。♪機嫌直せと言われてもお、怒っついでんかいのないのよお♪」

矢庭に慎次が唄いだす。

「それって、ミラクル・ローズの『無愛想ブルース』ですよね？」
「すぐさま溝口が言った。先日、桐壱をつくりながら彼女が鼻歌で

唄っていたのは、まさにこの歌だったのである。

<つづ<